

## 知ることと認めること（承前）

森 口 美 都 男

### 五

水素爆弾というものが、人類を破滅させるであろう、少くとも文化を根絶してしまうであろう、と人も私も憂え懼れている。しかし考えて見れば核兵器というものは、たかが物理學者の考えをもとにしたものにすぎず、たかがエンジニヤーのつくり出したものにすぎない。物理學者としての物理學者の扱うものはどこまで行つても要するに物質であり、物理的エネルギーの範圍を出えまい。どれほど大きな量のエネルギーをどれほど集中的に放出させて見ようとも、吹き飛ばされるものは要するに物質でしかない。核兵器にできることは、たかだか我々の肉體を殺すだけのことにはすぎぬ。それ以上の何ができよう。それは本来懼れるだけのネウチのないものではないか。

人類をはじめ、動植物のあらかたが遠からず全滅するであろう。それは必至である。しかもそれは、たかが太陽系のも、それも餘りにも微少なその一部に起つた爆發現象の結果にすぎず、星屑のまたたきの中にあつては文字通り無きにもひとしい。私の友や愛する親子兄弟やこの私自身の骨や髓や肉はバラバラになり、悉皆影も形もなくなつてしまふではあろう。けれども私たちの生命、というものは、果してそれ位のことでは消えたり失せたりするものかどうか。いや少くとも私自身についていうなら、そう都合よく滅してくれるものかどうか。私の肉體が亡び去つた時、私の全存

在が無に歸し、かくして私の犯してきた数々の罪や悪がそれ切り空無に歸してくれうるものであるならば、少くともこの私にとつてはこれ位有難いことはないともいえる。しかし、私にはそういう虫のよいことは期待できぬ。

昔は物理學者でもあつた人間の中にも、人間として我々の感謝に値する人々があつた。アルキメデスは、自らの學識が祖國防衛の爲に役立つことを深く恥じたとき、哲學者ロックは、物理學が學であり知識の名に値することを認めなかつたが、學者でもあつた物理學者が全然なかつたわけでもあるまい。しかしともかく、物理學者たる限りの物理學者が、よし私の身體をどうしてくれえようと、私の根性をどうしてくれえようとないことだけは確かである。私の身體の分解は、私の人格の分解ではない。デカルトのいつた様に私の精神が延長から完全に獨立な實體であるのかどうか、また身體が機械にすぎぬかどうか、よくは知らぬ。しかし、私の身體が私なる存在者のすべてでないことだけは確實である。

私は指先に一寸痛みを感じてもすぐ癩疽じやなからうか、今切開しなければ手遅れにならんかしらなどどろくに本もよう讀まぬ程、自分の身體の心配許りしている哀れな人間である。このことは包まず白狀しておこう。かつて我々は「父母はただ病をこれ患う」と訓えられ、また「身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるはこれ孝の始め也」とも訓えられた。ここには言葉本來の意味での眞理がある。中江藤樹も、孝というのはただ親を養うというようなことをいうのではない、と教えたが、自分の身體を大切にすること、これは確かにもつとも深い意味で我々の義務である。(君は啜うか?) かししいま私が氣を病んでいるのはこうした眞理に服する心がけからなのではない。ただ、自分の身が愛しくてならぬからにすぎぬ。また身體が全然なければ、如何なる文明文化の恩恵にも浴しえぬともいうまでもない。眼と耳を奪われれば、この世の如何なる美術、如何なる音楽へも私は近づくすべがない。しかも文化の享受、いな文明の創造でさえも人間の存在理由をつくすものでは斷じてない。そして自分がこれまで働き、犯した悪事の數敷を想起するとき、それらが水素爆彈などというチャチなもので消えてなくなろうなどどうして思いえようか。肉

知ることと認めること(承前)

體を輕んずることは間違ひである。しかし、いくら我が身が心配だからといつて、私なるものが私の身體に全面的、決定的に依存しているなどという他愛のない空想は、如何に愚かな私にも、それは偽であるとして明瞭に確實に知られる。如何に巨大な物質的エネルギーといえども、私の人格に觸れることだけは原理上できないことである。私が心に犯した深く重い罪も、またあるかなきかの善意も、そんなもので亡びうるものではない。

水素爆彈を怖れる時、私は、身體と身體のおかれた世界だけを有るところのものとなし、身體的生命には盡きぬものをば無しとしていたのである。また、少くとも私の罪こそは勝れて私がそれであるところのものとして嚴として有るのであるのに、それを無い、ことにして濟まそうとしているのである。フランスが原子爆彈の實驗をやろうと、中共がロケットを飛ばそうとそれは所詮他人様のことである。我々には彼らの世話を焼くに先き立つて爲さねばならぬことが他にあるであろう、——即ち自己自身の魂の世話が。私ははじめに「たか、物理學者」と呼んだ。ここで改めてその非禮を詫びよう。今日、最も深く苦惱する人々が、自らの魂の自由のために自己と鬪う人々が、科學技術者のうちにも全然ないとはいえまいから。しかしもし、彼れ物理學者にしてすでにその魂を見棄てた者であるのなら、私は誰に向かつて、いな何に向かつてそもそも詫びることをしもしえようか。

我々は前々節までにおいて、私が他人から認められたがることは如何ばかりであるかをさまざまの角度から反省し、我々は一般に「認められること」によつて結局どうされることを期待しているのかを考察した。そしてこうした場合の「認めること」は、ほぼ「嘉みすること」を意味し、このことの含蓄を「善し」と言うことによつて存在を能與すること」というように一應規定して見たのであつた。しかし私が自分自身について「それを認める」とか「それは認められない」とかいうことを言うのは、むしろ私の罪とか咎とか咎とかいうものに關してである。

また私が私以外の何人かに向つて、私自身に屬した何もかを認める場合に言うことばは、「……をしたのは私が

悪かつた」とか、「……の點は私が間違つておつた」とか、「……をして濟まない」とかいつた類の言葉なのである。こうした表現をその印しとしてそこで認められる對象は、一般に私に屬するある負い目、ないし無資格性である。また罪という程ではなくとも、「その點は認めませんが……」といったことを言う場合、この表現も、かく認められるへその點が、まさに認められるのであつて他様にされるのではないということによつて、既にそれが私にとつて何か負の價値をもつたものであることを確定する含みをもつているのであらう。「それは認めるが……」というこの言葉を言わねばならぬ大抵の場合、私はこの言葉とともに自分の力が何程か殺がれたことをイマイマしく思いながら、「それは言う迄もない」などと言つて先刻御承知という風を取り繕うか、あるいは、その損傷を埋めあわすに足る他の點を、今度は當方の利點となる様に躍氣になつて認めさせるとかして、「それは認めるが、しかし」自分は肝心の點では傷いてはおらぬし、傷く筈もないことをどうでもこうでも確定しておこうとしているのである。日常、我々が何かを認めるのは、それを避けた結果、却つて取り返しのつかぬ深傷を負うことになるのを、惧れるからであり、むしろかすり傷で済ます算段であることが多いと思われるが、深かれ浅かれ、認められるものはいつとも私にあつての何らかの損傷である。だから認めるといふことが私が自らの身についてなす場合には、他人が私に屬する何かを認めてくれる場合とは恰も逆に、この認める行爲に伴つていのは、力づけ勵まされることではなくて、常に力を殺がれ、ひるまされることなのである。

して見れば、〈認めること〉とは、積極的評價作用にもとづけられた一種の存在能與的な肯定であるとか、「善し」と言うことによつて力を贈り與えることである、とかいう我々が前々節で與えた規定は、ある重大な變更、ないし修正を迫られているといわなくてはならぬ。私が自分の過誤を認めるとき、それが自分の過誤をへよしとすることであつては大變だ。「自分が悪かつた」と言うことは、「善し」と言うことの正反對である。是とすることが〈認めること〉のすべてなのではない。〈認めること〉には、むしろ負の價値をもつたもの、ないし否定的な何ものかをその本

來の對象とする場合がある。

ところが私の短所や無能や罪責は、私が自ら認めるべき本來の對象ではあつても、他人が私について認めたり認めなかつたりする對象には全然屬さないであらう。負の價值をもつたことがらについては、私は「人が氣付かねばよいが」とか、あるいは「人に知れねばよいが」とは言つても、「この間違いが認められねばよいが」とか「認められなくて濟んだ」などと言いはしない。單なる知ることと區別された認める作用が、他人からして私にあつての何か（ないし私自身）へと向つている場合には、「認めること」の客體は、その否定の場合にも——つまり認められないものも

——専ら私にあつての何か善きものなのである。また私が私ならぬ他の主體に向かつて認めないものもまた——彼について彼にむかつて認めるものとひとしく——彼の長所や功績をなのであつて、その缺點や落度をなのではない。認める作用の主體が、認められる客體の屬している主體と異なつて、場合には、負の價值をもつたものは、肯定的にも否定的にも「認めること」とは無縁であり、そこで「認められるもの」はやはり功績や能力など、正の價值のものである。（私が他人について、また他人が私について、本來善くはあらぬ何ものかを認めるといえる唯一の場合は、既にふれたへを大目に見るゝ場合である。しかしそれは不都合なことを、特例として、止むを得ず可いことにすると、甘い評定をすることなのだから、かうした場合のあることも、實は、他者について私が認める對象は、一般的・原則的には他者にあつての負なるものでないことをこそ證據立てている。しかも、この特例的な認め方には通常認める主體からの恩恵が含蓄されている。それもやはり「可い」という資格を確立することなのである。）

かくして、認めることが評價作用をその契機として含まねばならぬとしても、それは決して、「非とすること」とも、また「是とすること」とも一がいにはいいえない。そのいずれであるかは、専ら、認める主體がそこで認められる客體の屬しているのと同じ主體であるかそれとも異つた主體であるかで決まるのである。主體が別である場合には、認めることは賞讃、感謝、義認、許可など、たしかにそれだけ様々の仕方での嘉みすることのほかではなく、何

らか「善し」と言うことによつて表明され、認める作用の對象は、本來的に正の價值をもつものである。またこの認める作用によつて、またこれとともに、まさにその正の價值が確定されるのである。これに反して、一つの主體が彼自身について認めるといわれうるのは、つねに何か彼の負えるもの、足らぬもの、缺けたる限りのものであつて、彼にあつての勝れたものでないことはすぐ上のべた通りである。他人が私について認めたり認めなかつたりするのは、私自身が認めたり認めなかつたりする餘地のないものであり、また逆に私が自らについて認めたり認めなかつたりするのは、他人が認めることも認めぬこともともになす餘地のないものである。

認められる對象であるのは、あらゆる場合に功績がなのでもなければ、またあらゆる場合に罪責がなのでもない。しかも、認めるというこの一つの作用に固有な特性、またその對象の本質をなす特性が何かなくてはならぬ。何であれ、「認めること」に適合する爲に充たすべき一定の條件がなくてはならぬ。それが「積極的或いは消極的に値いのあること」といつたので足りぬことは既に明らかである。知ることと認めることとの違いは單純に、知識作用と評價作用との違いではない。むしろこの條件は、これをみたくことによつて、私のものとしては罪や負い目が、他人のものとしては徳や功績が、認めることの對象となるようにする何ものかではなくてはならぬ。それは何であるか。

## 六

人間何者ぞ。固是蠢々たる虚榮の塊まり。漫りに地上に跋扈してこれ我が所有なりと叫ぶ。不遜も亦甚し。(漱石)

我々は、自分の取り柄となり、自分の存在理由になりそうなものならどんなものでも、自分に本来歸屬するものとして、自分の債權へ取り込んでしまふ傾きをもつていゝであらう。自分の存在理由をふくらまそうとする私の欲望

知ることと認めること(承前)

は實に底が知れない。我々は、自己の働きのならぬことの明かなものに對してさえも、いつもその所有權を主張しうる種をさがしており、いささかでも因縁のつけられそうなものなら、ことごとく自己の貸勤定へ付けることを忘れぬであろう。逆に自分の借りとなる事柄ならば、大抵のツケ落ちは素知らぬ顔で済まそうとしてゐるのである。

例えば、いくらか寶のある話<sup>ふ</sup>が私にできたでしょう。しかしそれが全く異論の餘地なく私一個の見識なり創見なりに出て、その意味で誰れ憚る所もないという場合はまずないといつてよからう。一〇〇のうち九九は受け賣りであり、せいぜいブチこわしになつて居兼ねない二次製品にすぎまい。ところが、私は他人に向つてはもとより、自身自身に向つてさえも、それに仕入れ先きのあつたことを出来るだけ軽く見積るとか、或いは悉皆晦ましてしまふとかして、自分の發明品に變えてしまふ傾向性をもつてゐるのである。私が誰かから面白い話をきかせてもらつたということ自身は、何も疚ましいことではあるまいし、隠しだてなどするには及ばぬ筈である。それを知らぬ人にさらに語り傳へることがもとより惡事であろう筈もない。私が益を得られた話ならば、むしろそれを弘く世間に知らせる事が私の務めでなくてはなるまい。ところが私には何故か、「これは誰から聞いたのだが」ということを意識して言わずに済まし、出所だけ省いてしまふ傾向があるのである。出所を言うとしても、それをどういう場合に、何の目的で言うかという段になると、ここには甚だ微妙な心の動きのあることが氣付かれる。Aから仕入れた話をBに、Bから仕入れた話をAにするでしょう。AとBとが互いに交渉がないことを知つておれば、別にウツカリしてゐるわけでもないのに、いや全然ウツカリなどしてゐないからこそ、私はその出所を言わずにすましてしまふ。私が氣をつけて出所に言及するとすれば、それは、早晚AなりBなりに知れてしまふことが勘定されてゐるからである。また私がCと一緒にAから話をきいたのであれば、AともCとも交渉の生じる可能性がないと思はれる人々が私の聞き手である場合に、私はある種の安心感を覺えるのであり、Cがそこに居合はず場合に比して、比較にならぬ程、能辯になりうるのである。(Aは、例えばR・アーンなどといった著名過ぎない外國人でもありうる。)そこにある唯一の

心配は、Cが私に先駆けて喋つてしまつておりはせぬか、という心配である。一對一では能辯な人が幾人か一緒になると、その中から妙に黙りこくる人が出てくるということは我々が始終経験していることである。

また私がAから仕入れた話しをBに——Aから學んだとはいわずに——したとして、今度はそのBがCに——それを私から伝えきいたとはいわずに——その同じ話しをしてきかされたことが私の耳にはいれば、私の心中は決して穩かでない。かつて自らが無斷受け賣りをした時には少しも自分をさげすまないで、おいて、それどころか得意満面できえあつたくせに、その同じ私が、役者がイレ變つただけで、Bというヤツは信用できぬなどと本氣で思つたりするのである。一旦口を出た思想は既に公共のものであると、他人の創見についてこそ言いはしても、世間の氣に入る思想がほんの僅か私の頭にも滞留し、自分がその運搬人を務めたというだけで、私はもうそれが私の思想と呼ばれて不都合はないものと決めこんでしまう。(この思想にかりにそうした私の力が何程か加わつたとしても、正にその部分は、世を眞に益する思想とはなつていないであろう。世を眞に益する思想は思想を私する人間からは出ないから。) 人から人へ伝えられることを私が歡ぶか、逆にそれに腹を立てるか、一にかかつてそれが私の名をつけてなされるか、私には知らぬ顔でなされるかによる。そしていうもさらなる事ながら、私がある思想を、はつきりその出所に言及しつつ語るといふのは、それはその人の卓見を世に知らせる爲では決してなくて、むしろ自分の薄弱な議論を補強した積りであつたり、他人の批評を封じる爲の小細工であつたり、私の博覽を装えると思つてであつたりするのが常なのである。(勿論實はそれは、目の利く人には私が眞に博覽ではないことの動かし難い證據になるだけである、しかしそうする當人がそこまで氣がついていることは少ない。) 私は借りたものを借りたものといわぬだけではなく、具合が悪くなると、自分の無能のせいであけてしまつた穴をば、イケ洒々と誰それ先生——ラッセルさんのハイデッグ——さんだの——の借り勘定につけておかせる積りであったり、または誰それ先生の勘定である以上は、金輪際穴はあいておらぬと威丈高に言い張つたりもし兼ねないのである。(どこだかの醫學部から放射能のあるコバルトだかを素手



で盗み出して青くなつたお人好しの話しはまだ罪がない。しかし苟くも學者の世界になれば、自分がまず泥棒を働いておきながら、盜難者の親類氣取り、風向き變ればチチドコロに被害者面らをして見せる人間位淺ましいものはない。しかし悲しい哉、それこそ自他の差別をつける我れなるものの實相であるだろう。そういう人間が澄まして哲學教師を商賣にするということになれば、有るものを無みする點で、水素爆彈の威力など到底物の數にもは入るまい。怖ろしい哉、そういう人間が今日の日本の大學という大學の哲學科には、満ち満ちている。そんな哲學科は外から消されてアタリマエで、それが無くならねば世界や國の方がつぶれてしまう。

このように私なるものには、人から貰つたものをば、これは貰つたものではない、自分が始めから持つておつたのだ、或いは、自らの力で創り出したのだという方向へどうでもこうでももつてゆこうとする矯め難い性癖があると思う。しかしここでさらに、この番ばしくない泥棒根性は何も私一人には限らず人間には誰にでもあるものなのだ、と言いたくなるばかりか、なおそのうえに、自分の泥棒根性は外の人達に較べればまだまだ餘程少ない方だなどと勝手な見積りをして、この少なさを自分の取柄に敷え、自分はどうして可成りマシな人間の部類には入ると考えさえするのである。自分が泥棒かどうかよりは、どこかよそに大泥棒がいはいせぬかとまず考えるのである。自分の他に泥棒をみつけてきて、自分が泥棒でなくなるわけでもないのに、何かその様な事を可能と考えるのである。あるいは、自分とはこの様にどんなに小さなことをでも稼ぎの種にできることは見逃さずにその種にして、自分を少しでもマシな人間につくりたがるどうにもこうにも仕様のないシロモノだということにはいささか心付いても、また自分の泥棒根性は決して人より少ないどころではないと一旦は神妙に認めても、しかもその尻から今度はこのほかならぬ神妙さを自分の取柄に敷えたり、あるいはこうした一連の反省を他人は大抵はもつておらぬのに、自分は、自分の下らなさをここまで自覺したのだから、人とは矢張り何處か違つていると考えたりし、しかもこうした洞察自身は自分の洞察であり自覺であつて、別に他の人から教わつたとか、示唆だけでもされたとか、昔からの教えが縁になつて氣がついた

とかなのではない、と考えずにはおかないのである。そうでなければ、そういうものからのお蔭であるとは認めても、今度はまた自分が感謝の念を失わないでいる今どき数少ない人間の一人であるといつしか思い始めており、矢張り自分が見所のある、他人よりは餘程マシな、他人よりは存在理由の確かな人間だと思ふか、さらにさもなくば、自分の氣のついたこのこと位は別に洞察といえる程のことでもなければ、鋭利な分析ともよりいふべきものでないと考えはするけれども、しかもその様に自分の能力の貧しさを自ら謙虚に認めえている點では、矢張り自分を他人以上に存在理由の確かな人間だといつしか思い始めているのである。いずれにしても、私にあつての、自分を人よりマシだと考え、そのマシであることから自分は何がなし取れる筈だ、他人によりは自分にこそ存在の理由があるのだと思ひなす性癖の根は、殆んど絶つすべもないものであると考へざるをえない。

我慾というものにはもとより人によつて深淺の差があるであろう。私などの思いもよらぬ潔く美しい魂の持主があるであろう。そういう人々の中には、ことによると「嘘」とか「盗む」とかいう言葉の意味を全く知らぬ人があるかも知れない。こうした言葉の意味が私に分かるということは、私が自ら盗んだことのある人間、嘘を吐いてきた人間である、ことを含意している。「嘘」や「盗み」の意味は、記述や定義によつて理解されるのではなく、自らそれを犯したことによつて、あるいは、現に今も盗んできた數々のものをかくし持つており、白を切り通していることによつて、つまり直接の體驗によつて悟られるのである。

私が完全に正直な無垢な人間である振りをしようと思えば、私なら「ウソ」という言葉をきいた時、げげんな、腑に落ちぬ顔をして見せるであろう。或いは相手が嘘をついたことのない人間などただの一人もありはせぬ、ということを知つており、従つて安手な芝居の打てぬ人であると思つたならば、私は大體の見當はつくが、モ一つ切實には分らぬ顔つきの、今少しく手のこんだ芝居に切りかえて、「何しろ覚えが無いもので」という様子を却つて抑える方の用心をするであろう。また「振りをしているのではない」という構えをまでも見破る程に眼力たしかな相手ならば、「振

りをしてゐるのではない、という振りをしていやがる」と見られぬために豫め強たか悪人振つておいた上で、機を見てトンチンカンな受け答えをし、「あれで存外人は好い」ということにする途を工夫するかも知れぬ。高貴な人間、悪いことはようせぬ人間、何かこの世のものならぬ要素をもつた人というものはある。ところが、またそういう人間であると他人に見られる工夫には、いくらでも手の込んだ、淺ましいとも何ともハヤ云い様のない手管がいくらもあつて、果ては人間の推理能力には限度があることをまでもよいことにし、嘘は言うておらぬという嘘を吐いてゐるのかいなのか、もう自分自身にも判然とはわからぬ様になる迄に媒介に媒介を重ね、他人もろとも自分自分をも撒いてしまふ算段にさえ鋭く細かに心の動くことがあるのである。この様に考えてくると嘘がないということは、言葉を使い出して以來この方、ただの一瞬間も自分にはなかつた様にさえ思われてくる。

しかも、「嘘」という語の意味が分らぬ顔をするというこの種の淺ましい計らい自身を、まるで見當もつかぬことと途方に暮れる人で、しかも絶望的に愚鈍なのでもない人がやはりどこかに存在するでもあろう。「チヨイと失敬してきた」とか「チャッカリしとる」とかいうことばの可笑しさを知らぬ人があるでもあろう。しかしもしその可笑しみの方は甚だよく解するが、盗みの方は知らぬという人があるならば、そう標榜した刹那、彼は既に吾がものでないもの——野暮でないことをか然らずんば無垢であることをか——をば吾がものと稱したことになるであらう。

〈自分のもの〉という概念、〈許しもなしに〉という概念をもたぬ清淨な人があるかも知れない。しかしかかる人も自らは盗んだことがなく、従つて能働形の「盗む」の意味の實感はなくとも、盗まれた經驗はあるのではないか。従つて受働形の「盗まれる」の方の意味ならばやはりよくお分かりではないだろうか。満三才の幼児が最も氣にすることの一つは、「盗られへんか?」ということである。幼児から奪う者は嚴として存在するのであり、それは一般には他の幼児である。〈盗まれること〉の概念は、〈吾が物〉の概念を含むであらう。人間となれば、幼な兒ですらも自他の差別を超えてあることはできぬのである。

## 七

眞己を以つて假己に克つ、天理なり。身我を以つて心我を害す、人欲なり。(佐藤一齋)

自分の功績だの貸しだのを忘れるということ、つけ落ちするということ、それを自ら消してしまふということは、我慾あるもの、自他の差別をつける者にはない。私は返して貰わなくてよいと自ら明言したものをまでも、自分の貸しとして何時までも何時までも覚えているのである。返済を自分から進んで免除しておきながら、私の貸しは決して私の心の底では帳消しになつていないのであり、免除してやつたということがむしろ貸したこともろとも、むしろ後者を倍加しながら残つてゆくのである。そしていつも自分の僅かな貸しが倒されはせぬかを氣づかっているだけでなく、自分の寛大が忘れられぬように、他人の内なるその記憶痕跡を時から時へと強化する必要をも感じるのである。そこで前に考えた「私が他人から認められること」の意味も、實は單に「嘉みされること」につきるのではなく、私にあつて無しとされる恐れあるもの、忘れられる恐れあるものを、より正確には「無いことにされるのではないか」と私が危惧しているものを、「確實に有りとなされること」であつたのである。

私はしかし、自分の罪責だの借りだのは何時もかつも忘れ通しに忘れてゐる。私は人々への借りを踏み倒して微動だもしない許りか、呉れたがつてゐるから貰つてやつたのだといふ兼ねないであろう。私は、奴が貸すからには、いづれ何かアテがあるに相違ないと考え、貸手がそうでないと分つても、悪くカンぐつてすまなかつたとは思わない。また、相手が下手に貸しを請求したりすれば威丈高に逆に喰つてかかるかも知れない。職務上の落度——これは借りの一種である——を咎められてムツとしなかつたことが、ただの一度でも私にあつたらうか。「冗談じゃない、それ

を忘れられてたまるもんか」と相手のいうそのことは、「そんなことを何時までも覚えていられるもんか」と私のいう正にその同じものである。

私は、何にもまして何を口惜しく、いまいましく、業腹なことと感ずるだらうか。それは、私に属するもののように何よりも私の値いをなすと私が自ら心得ているもの、わけても私なる人間の存在そのもの、私のいわゆる身上をなすと考えているそのものを、他者によつて否まれた場合、即ち、そのものはそれとしては成程値高きものではあつても、それは私には實は屬していないとされる場合である。私が認められたいものとは、それが無ければ、私自身の存在理由がなくなると私の思う所のもの、如何にもして有るとされねばならぬものなのである。

(一) 人は彼がそれで長じていることがらを、もつと廣くはそこから彼が何らかの利得を引き出しうる見地をば特別に重視する。生まれのよい人は、生まれの悪い人間を輕侮する前に、まず生まれの善し悪しという見地自身を大切にするのである。政治的手腕に秀でた人が、政治性なる見地の status が賤められるのを平靜にきくことは困難である。體力の貧弱な、運動神經の鈍い人間は、スポーツに重きがおかれること自身に不滿を覺えるであらう。生來のキッチリ屋と生來の太ッ腹とは、それぞれが客觀的に上位のものとなす徳目が異なること自身に不滿を覺えるであらう。(倫理學の教師は、倫理學に何の情熱も感じていない場合でも、この學科の重んぜられることを慶賀し、智慧に興味のない哲學教師も、世人が哲學を無用視することを歎くのである。)

ところが他人がではなく、この私が私自身について認めねばならぬもの、つまり、自分の罪責だの、過誤だのは、それが無ければ、どんなにか好都合と思われ、できることなら無い、こととして置いて貰いたく、自らも無い、ことにしてしまいたい何ものかであらう。また自分に屬したものが、價値の上から負へ判定されざるを得ない場合、それが私なる存在者に、より本質的に屬し、私自身とより分かち難く結ばれたものであるに従つて、私はこれを認めることをますます強くしぶり、或いは避けようとするであらう。そしてその非なることがらが私の存在のいわば最深の層に屬して、その非存在が私の存在を、またその非存在が私の存在を含蓄する程のものである場合には、それを認めることは、殆んど私の非存在の確定を意味し、かくして私の存在可能性は、それを認めぬこと、即ち、そのことを非なら

ぬこととするか、それとも（それ自身は非であるが）それは有らぬとするかの可能性に依存すると思われるのである。（認めるということには、認められたものを世の中に受け入れるという含みがある。一人の人の何らかの資格が認められた場合、その人は或る世界へ成員として容れられたのである。ベルグソンも教えるように、私が自分の罪を認める時にさえも、私は罰せらるべきものたることを肯いつつ、自ら社會の内へ入れられることを意志しているであろう。そして「有る」、「存在する」ということは最も重要な意味の一つは、世界に屬するということである。）

有るところのものをば、それを無いとすることが可能であると見えるにも拘らず、或いは單なる己れ一個の關心の上からは、それを無いことにしてしまうことが必要であるとさえ思いなされるにも拘らず、（己れの我意を殺し、決心して）それを有ると言いあらわすこと、——それがそのものを認めることである。

認めることは、有るものを有りとなすことである。その限り「認めること」は、「知ること」に、少くとも「知ること」の或る意味に極めて親縁な何ごとかではなくてはならぬ。知識とは、その最も重要な意味の一つにおいて、眞なる見解のことであり、眞なる見解とは、「有るものを有るとなしている」見解のことであるから。

人間にあつては、事物事態を知ることとは決して單純に事物そのものとの十全な合致なのではあるまい。人間の知るということには、どこまで行つても何ほどか映すということが含まれねばならぬが、映すものが映されるものと十全に合致するということは、映すということのある限り望みえないことであるだろう。映すということは既に映像が原物と二つであること、その外にあることを含意し、それはまたある觀點からの抽象をも前提している。寫映は常に原物に何らかの點でお届かぬことによつて、つまり原物からその何かを省いていることによつて、即ち本來不十全であることによつてこそ、もともと何ものかの寫映なのである。事物についての人間の知識は決して事物自身の完全な自己現出なのではない、またひたすら現出でだけあることもできない。人間のもちうる知識は、どこまでも判

斷という性格を免れることができない。

知識はもとより眞なる判断として、事物のある象面へ、ないしその成分へは十全に合致するといえねばならぬ。しかも、やはり何ほどか「然りとせず」ことを含むと思う。たしかに知識を知識とするものは、（我々自身強調せねばならぬが）それが斷定（臆斷）であるという點にはなく、むしろ事物の直觀（事物そのものの現出）を含むという點におかれねばならぬ。また知識はより多く直觀であることによつてより勝れて知識だともいわれねばならぬ。しかし何ごとかを知ることとは、何ごとかをただ感じ、思いうかべることではなく、感覺や心像や想念の單なる存在はまだ知識ではない。知るといふのも何かを定立すること、措定することではなくてはならぬ。人間の知は純一な見ること、十全な直觀ではない。かくして、知るといふことも、たしかに少くともその一面において存在肯定でもあるといわねばならぬ。それも「有るものをば有りとすること」なのである。

しかし認めることの方は、單純に、それが何であれ、「有るところのものを有るとなすこと」なのであるまい。認められねばならぬものとは、それを無みしようとして止まぬある否定力、ないしはある殺意ともいふべきものの場に、少くとも可能的におかれているものである。自明的に、ないしは安泰に有るのではないそうしたあるものが、殊更に、改めて、有りとなされた場合に、はじめてそれは單に「知られた」とではなく、「認められた」といわれるのである。従つて、認めることは知ることの一種であるといつてよい十分な理由がある反面、それはまた單なる知に對立する含みをももっているであろう。何人かによつて無いとされたもの、その意味ではある觀點からしては實際無かつたものを、（例えば埋もれていた貴君の才能を、私が）有るとなすこと、それが認めることだからである。ある主體が、彼の視野に落ちておらず、従つて當面直觀できていぬものを、いわば己れに克ちつつ改めて言葉に言いあらわすことによつて有りとする時、彼はそのものを認めたといふ。

しかも、認めることは、無いものを有ると言うことの意味で嘘を言うことなのではない。それはツクリゴトを言う

ことではなくて、むしろ創ることに類する。知ることの一種としてのそれは、この認めることがなければ遂に失われたであろう何ものかの存在を、いわば回復し救助しうるような特異な知り方であると考へねばならない。我々が何かを認めるためには、自己の當座の視点を超越すること、あるいは少くとも視向を轉ずること、また視力を強化すること（眼を凝らして視ること）が要求されるであろう。

眞に充實して有る所のものであればあるだけ、しかもそのもの忘失される可能性が大きければ大きいだけ、そのものを再び、あるいは改めて有りと言うことが、より重い意味で、また深い意味で認める *recognize* ことといわれうる。有るものとは力をもつもの、我々の行動を制約するもの、運命を左右するものことである。また忘失されることは、それらが應ずる必要なしとされ、我々の生命にかかわりなきものとされること、つまり無とされることである。我々の生死が深くそれに依存している何かが一旦忘れさられた後に、再び、さういうものとして見直された時、それは認められたのであり、一旦奪われた存在を回復せられたのである。「認める」という言葉の最も切實にあたるものの一つは、我々の他者への負い目であつたが、我々は他者から何かを負うが早いからそれを忘れ始めているであろう。我々の自我は他者の恩恵と自己の負債とを忘れる不斷の傾きの中にあつた。放つておかれれば、それらは我々によつて消しに消された。そして負債も恩恵も、我々がそれを認めた時、始めてたしかに有るものとなる。

我々が何かを認める行爲には、我々の存在條件に多少とも重大な變動が生じるといふ豫料が含まれている。どの様なカテゴリーのものに對してであれ、またどの様な仕方においてであれ、我々が認めることをなす時には、少くとも何ほどか躊躇の感じがただよう。時には何か覺悟に似たものさへ要求される。私が何かを認めるためには、いわば自らが身を置いている場の力線の變化を受け容れねばならぬ。それは現状への安住の態度をふり捨てることである。認めることは決斷を含み、超越を含む。

我々によつて認められると本来言われねばならぬものが、この様に原理上我々によつてまず無とされる危険にさら



されていたものであるとすれば、自我中心的な主體たる人間にあつての何もかを知る、働きはそれが認め、ことと一つになつて始めて眞に知ることそれ自身でもありうる、といひうるであらう。原理上同時に他の何もかを捨てること、遺すこと、忘れることを伴つてのみ成立しうる知識は、その限り、有るものを無いとする不正をも同時に犯していたのである。また、自然的な構えでの人間の知は、自我中心的主體のそれとして、本來、獲得的・奪取的であり、自己の狭少なパースペクティヴの中へ入り來たる以外の物は措いて省みないであらうが、かりにかかる仕方でも事物に接するということがはじめから人間になければ、認めるということが凡そ成り立つ餘度も必要も人間にはなかつたであらう。何ものをも忘れず、遺すことのない知の主體にあつては、その者が認めることによつて越えねばならぬ條件そのものが免除されている。あるものが彼に對して有る爲には、他の何ものかが半面でも無とされていねばならぬ様な主體に對してだけ、その無となされたものの回復と復權とが問題となる。忘れる存在者に對してだけ想起ということが意味をもちうる。認めることは、單に見ることに對してよりは、むしろ心づかいや思い遣りに親縁的であると思う。それは少くとも眼の届かぬ所へ、心の眼を送ることであると思う。

人間の知といわれているものは、たしかに有るものを有るとなすことなのではあるが、しかもこの同じことは——彼が自我中心的な主體である限り——實は（他の）あるものをなしとなしていることにほかならず、その意味ですべての有限知は虚偽を含むといわねばならぬ。認めることはその様な虚偽の否定にほかならない。その様な虚偽を越え出ることとして、またいわゆる抽象的・一面的知識の否定にほかならぬ。認めることは知ることの一種である。しかも同時に知ることの否定といふ含みをもつ。認めることは、いわば正義からの要求であり、知識を正義に服させる働きなのである。そこで眞に深く、眞に具體的な智慧の探究は、知ることをば、認めることの方向へと、どこまでも越えることにあるのではないか。その意味ではまた、智慧とは、それが人間によつて追究さるべきものたる限り、むしろ認めることの一つであるといつてはならぬだらうか。探究は具體者への歩みであつてのみ「探求」の名に値する

からである。

## 八

To know the truth partially is to distort the Universe. (Whitehead)

動物的生命に對してまず見えてくるのは如何なるものがであろうか。それは、その生きものが喰らうものと、彼自身をばとつて喰らわんとするものであろう。その生命を養うるものと、その生命を亡ぼしうるものとが、その生きものにとつてのあるものなのであり、またそうしたもののそれに對してあることは、直ちにまたそうしたもののそれに見えてくることにほかならぬであろう。あの偉大なドイツの哲學者の教えをまつまでもなく、地上の生命にとつては、ものからの觸發を媒介にしなければ凡そ直觀は可能でない。單に感性的のみある存在者にあつては、凡そ知識なるものはないという方が正しいであろうが、もし感官知覺の如きものをも知識と呼ぶことを許せば、そうした知識は、すべてその自然的生死を制約する力に對する、この生命體の可能的な對處ないし應接にほかなるまい。感覺印象をば結局身體の存在から不可分のものと考へたひとしく偉大なフランスの哲學者も、また "Esse is Percipi." といったやはり明敏なイギリスの哲學者も、同じ事實を見ていたものと思われる。あるものとは、ここでは自己が生きる必要上應答さるべきものことであり、それがまた直ちに見えるものなのである。この場合見るとは、有縁のものを取りあげることにはほかならない、従つて直ちにまた無縁のものを割愛すること、オミットすること、袖にすることにほかならない。ある者によつて知らん顔をされたものは、その者にとつては無いも同然なのである。いな、その者に自らを越えることがない限り、彼にとつては實際無いものなのである。見ることは同時に無みすることである。

知ることと認めること(承前)

人間にあつても、我々が自然的な生命を營んでいる限り、そうした自然的態度 *naturliche Einstellung* に對して見えて來、現われてくるものとは、すべて我々を可能的に生かし殺す効果をもつもの以外ではなく、我々の側での間髪を入れぬ手當て、處置を迫つてゐるもののみであるであらう。狩獵する原始人にとつて、就中明晰判明に直觀されるものは角をかざして疾驅してくる獸の姿態ではないだらうか。生ける自然の中では最も力動的なものがまた最も判明に形象的でもありうる。見られるものは如何なるものも姿をもつ。知の相關者は常に形相であらう。しかし青く澄んだ嬰兒の眼がまず向けられるのは、動いてゐるもの、躍るものへである。物はまず見られた上で取りあげられるのではない。物が取りあげられたことは直ちにそのもの見えたことである。全體の中から分ち出すということと見るということとは二つの事ではなく、ものを知るとはものが分かることである。圍碁で「咎め」ということをいい、その應手のことを「挨拶」というが、それは布置の全體の内、ある一つの石の働き、或いは効きが見え、その力に對抗してバランスをとることであらう。存在するものとは差異を生じうる力のことである。その差異を可能的に蒙る者がその力を凌ぎえ、自らの身を保ちうべきならば、彼にはその存在者が見えねばならぬのである。

自然人がその中に生きてゐるのは單なる環境世界であり、彼の態度は純一無雜に奪取的・利用的であつて、その感情は濁りのない嗜好と嫌惡、快と不快とに盡きてゐるであらう。ここではすべてのものがいのちをもつてゐるであらうが、いずれも畢竟ものにすぎず、それらの中心にあつて視野をひろげてゐる彼自身もまた遂に一個の生きものにすぎまい。彼の獲物たりうるもののクラスと彼に挑み脅すもののクラスとが、彼に對して凡そ何ものかであるものすべてであり、またそれらは洩れなく彼の視野の明るみの中で姿をとるであらう。

この彼の住んでいる環境世界は、知識の世界としては、即ち自然への密着から「眺めること」の方向へいくらかでも斜がされた場合、單に對象的な事物が會われる自然因果の世界となる。それはせいゝ科學的・客觀的な、しかしどこまでも自我中心の世界にすぎない。しかし同時に、この様な世界でもエゴが生きたエゴであるならば、剝離さ

れた眺めのそこから自己に狙いをつけている他者の眼を感じ、その視線に射すくめられることがあるに違いない。自己とひとしく奪取的な他者の視線が自分を鋭く窺っていること、見据えていること、むしろそれこそがまず私に見えることですらあるであらう。それは我々が「対象」ということばで普通解しているものとはちがう。しかもやはりその様な存在者は、單に私が處理しようとしているもの、おそらくは私が即刻抹殺することにとりかからねばならぬ存在者に過ぎまい。

ここには一つの自我中心的世界への、他の同じく自我中心的世界の侵入の如きものがあるであらう。その客體の背後には私の客體化作用を否定しようとする、そして少くとも私なるものと對等な、力の存在が感じられる。何か客體ならぬものが、むしろこの私なる見る者をば逆に客體化しようとして見ているのが感じられる。そしてこの他者が見ているのを感じるその感覺は、もはや單なるコギトの作用には盡きぬ趣きを持つのである。そこには單なる對象規定などではなく、また單なる幾何學的形象ではない何ものかを、即ち顔をもつた者が居る。ここには極めて稀薄ながら、へ認めることゝが始まつている。ただならぬ氣配は感じられるのではあるが、それはまた異常を認めることでもある。エゴはここで、單なる形象ではなく、何か意味あるもの、由々しきもの、確認を要するものに相對しているのである。(群衆の中にフト認められた友の姿というのは、今の場合とは逆に親しみ深いものではあるけれども同種の認め方である。信號の確認というのもこれに類する。幼児が脅えたり笑つたりするのも、見て、<sup>(1)</sup>そうするよりは認めて、<sup>(1)</sup>そうするのである。)しかもここにあるものは、なお單なる自我中心的世界のいわば衝突であるに過ぎない。二個の私が互に相手から取ること、奪うことをめざして向かいあつてに過ぎない。私的な世界、單に他動的な否定の可能性があらわれているに過ぎない。ここにある世界は、なおどこまでも自我中心的世界である。二つの私的世界は、<sup>(1)</sup>一つの世界を形成しているとはいえない。

(1) 詳しくいえばここでの自我は、實は個ではなくて、種の内にいわば埋没した、従つて種の單なる代表の如きものに過ぎま

知ることと認めること(承前)

い。だから生物學的な個體としての主體が、例えば同じクランに屬する個體と衝突するのではない。「原始社會では自己中心性は第一人稱複數の形をとる」(トインビー)。従つて、ここにももとより好意的なるものもあるではあろうが、しかもそれはまだ友というものではない。單なる自然社會にはまだ公共性が成立していない以上、「私的世界」ということばも實は適切とは言えぬが、よい術語が見あたらぬ。ベルグソンが教える様に、自然というものはむしろ個を殺すものであろう。

しかし自然人もひとであり、可能的には人格でもあるとすれば、彼の環境世界もまた、可能的に一つの具體的共同世界の契機なのでなくてはならぬ。彼の單なる好惡の情は、實は愛憎なる活動の單なる表皮にすぎぬのでなくてはならぬ。彼の視野に在るもの、彼に知られるものすべては、好ましき形象も、厭わしき形象も、それらの地をなすうでもいいものと共に、可能的に、宇宙なる全體の餘りにも微小な部分集合をなすにすぎまい。自然人のヴィジョンが彼の環境世界に對する適應に對しては如何によく働かしているにしても、彼が可能的に人格であるべきならば、彼はその單なる自然的生命に甘んじているというその事によつて、少くとも可能的に宇宙に不正を働いていたといわれねばならぬ。彼は知識主體としては、眞理を單に部分的に知つているにすぎない。彼は少くとも象に對する地の、またそれら兩者をつつむさらに廣大なる地の權利を冒しているのである。またその世界が原始的な狭少さを越ええているにしても、それが單に客體的知識の世界の方向へのみ精密化して、それを十全のものと思ひ做していたのであるならば、まさにそのことによつて、彼のこの不正は却つてより重大なものとなつており、自然的な具體性、即ちデュナミスとエイドスとの和合をば、いわばデュナミスを殺すことによつて破つていたとも言われねばなるまい。

我々は、すべての物を吾が物となす主體、即ちエゴである限り、いわゆる文明世界にあつても實は獨我論的な世界に住んでいるということができ、その場合にこそすぐれて野蠻といわれうるであらう。野蠻な私が「世界」となすものは、われなるものを唯一の中心とし、その私的關心に對して見えてくる事態だけの總體である。そしてこの場合の私の野蠻性とは、その私的總體をもつて凡そ有りうるものすべてと心得ているそのことにほかならない。

私なる我れの獨我論的な世界と他の我れのそれとは、互を眼で殺し合う自然人の私的世界の衝突と類比的に、それぞれの含む事態の少くとも一つに關して、反對或いは矛盾の關係に立ちうるであらう。いな實際自稱文明人それぞれその自我中心的世界は、一般にその様な關係に立つており、いわゆる「文明世界」を不斷に引き裂きつつあるのである。私の世界には水爆禁止の示威運動などは、現在最も重要なことではないという事態が屬している。君の世界にはそれこそは何を措いてもなさるべきことであるという事態が屬している。私の世界にあつては君は何らの功績もなき人である。君の世界にあつては君自身が世界平和の功勞者である。

一般にその成分たる事態の一つに關して、反對あるいは矛盾の關係に立つ二つの（私中心の）世界が、そのまま一なる共同世界をなし得ぬことはいうまでもない。二人の人が一つの共同世界に屬する人格であり得る爲には、その二つの私的世界が互に少くとも整合でなくてはならない。それぞれの世界を構成する事態はすべて合して一つの世界へ統一されねばならず、一方の世界に眞實として屬する事態が他方の世界で虚偽となされていることは出来ない。この様な共同世界を成立させる爲の條件が、われわれが相互に事實や理想を認め合う、ということなのである。それは、一人が自己の世界に屬させているもの、即ち彼とともに有らしめて、いるもので、しかも他の一人がその居る世界には屬させないもの、つまり後者によつては無しとされて、いるものをば、後者がいわば奪發して有りとなすことなのである。その時はじめて、兩者の世界は融合して一つとなり、君と私とがそこへ共に歩み入つたのである。いわゆる「妥協」といわれるものはその低次の形態であつて、事實ならぬものを事實と想定して、即ち時には虚偽をも嫌わずに、二つの私的世界の衝突をさけることであらう。認めるということは既にいつたように、本來はツクリゴトをすることなのではないが、その轉落形態にあつては、創造がいつも虚構へと轉化する傾きをもつことも否定できぬ。共同世界の最も低級な形態としての政治體はここに成り立つ。それは究極的には自己の内に統一の根據をもつものではない。政治的秩序も本來は、後に示されるような根源的な認める行爲の基礎の上にだけ建てられうるのであつて、單

に功利的な主體の協定や利害調整などだけで維持されうるものではない。<sup>(1)</sup> また一つの共同世界が單に政治にのみ頼ろうとする時、それは根本的には既に壞れ始めていっているといひうる、いな壞さるべきものだと言ひうる。しかもそれも、ともかく人格の——抽象的人格（法人格）の——世界の最少限にはちがいない。

(1) 我れというものは萬人に對する狼という様な單純なものではない、我れは總じて人に跳びかかつてたり喰ひついたりする様なへまはしないから。一寸でも自分の勞苦を省き、少しでも面白い目をしようとして始終落着かぬ者といつたのでもまだ足りない。我れというのはそんな生やさしいものではない。事と次第によつては我れは勞苦を厭わないから。狡るさや卑怯さということを除いては、我れというものは考えられないであろうが、しかも我れというものは狐よりも無限にずくある。それ自身をどこまでも特別扱いにして止まぬもの、また他から特別扱いにされねばどうしても承知しないもの、しかもそれで涼しい顔をしてゐる者が我れである。平等を要求して止まなかつたのでありながら、しかも平等になつた曉には、平等では満足しない者が我れである。我れとは、「我れこそは平等の首唱者であつた、その實現の功勞者であつた」と呼ばわつて止まぬもの、徹底した不平等主義者のことである。

淺ましい者とは出来るだけ多く取り、出来るだけ少く出す所のものといつてよいかも知れない。そうするとしかし、我れとはただ單に淺ましい者と言つたのでも足りず、他者よりも多く取り、他者よりも少く出さねば承知せず、また己れの出した以上を取らねば承知せぬ者のことである。淺ましいのは、すべての畜生と、またそれに基づけられてゐるすべてのものがさうであろうが、自他の別ということ、及び比較計算ということを除いては我れというものは考えられない。知識主觀という様なものは、それが我れである限りに於て、「他より多く取る者」の單に抽象的、一面的な限定であるにすぎない。我れ概念と人格の概念とは區別されねばならない。

「認める」という言葉は、多くの場合、單に「同意すること」を意味するが、何人かがこの私に向つて「君には貸しがある」と言う場合、私が彼と同じ一つの共同世界の成員であり続けようとするならば、私は自分の借り、を正當に認めるということ、負債の存在に同意することを、最少限しえなくてはならない。負債を認めることは同時にバランス、つまり秩序を認めることである。（負債の承認とともに可能的な返済が始まる。貸借と清算という方法はいわば

持續の中でバランスをとることである。時間をおいて應答することである。この意味で認める作用は共同世界成立の基礎條件であると正當に言いうるのであろう。認めることが、ともかくも世界なるものを建てるのである。そしてそれは本來は、單なる私的自己を越え出ること、自己以上の者に關心づけられること、吾がものならぬものを吾がものとなさぬことを意味するのである。

自然の世界は世界としては、取り合い、奪い合いの場であつた。共同世界は取るのみではなくて與えること、少くとも返えし與えることが加わつてはじめて可能になる。しかし政治的・經濟的な世界では、この與えることも、止むをえずまた自らの利益の爲になされるのであり、そこにある秩序は、なお公平原則に基づくやりとりのバランス、配分的正義、利害の調停にすぎぬ。眞に具體的な共同世界とは、「取るということ」が「與えられるということ」によつて完全に置換された世界、つまりひたすら與え合い、恵み合う世界であるであらう。そしてこの轉換の軸になるものが人間の最も深い意味での認める、行爲だと思ふ。

一般に自然的世界の成立が、根本的には、知識主觀の「知ること」、即ちコギトによつて制約されているといふるならば、公共的世界の成立は、單なる「知ること」を超えて、人格の主體の「認めること」によつて可能になるといふ。そして如何なる知識主觀も、現實には私慾ある我れの抽象的契機にすぎぬものとすれば、公共の世界が、單なる知識主觀の多數性などによつて成立しえぬことはいうまでもない。認める、という作用がなければ、共同世界は、數多の私的世界へバラバラに分裂し、解體するほかはない。世界は不斷に建てられることがなければ、壞われ落ちるほかはない。

## 九

此の世界は壞れうるものである。いな此の世界は、それが自らの力のみによつて立ちうると誇る時には必然的に



壞われずには濟まぬものでさえある。

カントという人は一般に個物なるものをば、可能なる全述語に關して餘すところなく限定されたものと考えたが、これと類比的に此の世界は、可能な全事態（それぞれ有限なる個を主語とする）に關しての餘すところのない限定、すなわち事實の絶對的總體として考えられうるであろう。しかしかかる諸事實を結び合わせて一なるものとなす集約力は世界内の一體何處から汲まれうるであろうか。我々は、「世界」とか「宇宙」とか呼んでいるものをば、何か不動のもの、その一なること、の疑いえぬものとして安心しているが、我々はこの場合にもまた、自らの權利にもとづいては有らぬものを有りとしているのではないだろうか。

一つの公共的な世界は、それに屬する主體がともに事實と理想とを認めることによつて、そして究極にはただ一つの眞實を認めることによつて始めて成り立ちうるのである。「われ思う」が雑多な客體を一つの對象的世界、自我中心的な世界へと構成しうる様に、「われ認む」なる作用がともかくも一つの共同世界を建設しうるのであつた。

しかし我々が何よりもまず認めざるをえぬことは、我々がもともと「認めようとはしない」存在者であるという、正にそのことではないか。私慾の爲に事實を無みする者、他者を見棄てて顧みぬものこそ我れであつたのである。

日常的にも、我々が「自分が悪かつた」と心から言うことは、極めて極めてむづかしいことである。いなこの言葉を何の下心もなく素直に言うことは、人間自らの善意だけに頼つては出來ぬことであるだろう。我々が抗辯もせず自分の非を認める場合があるとすれば、それは、その非を認めることによつて自分の失うものがさしたるものではないからでなければ、むしろその認容とひきかえに、より以上の利得を期待しているからではないか。いわゆる「自己批判」をやる人は、まず例外なしに「しかし基本的には、正しかつた」——まことに愚かな言草ではある——ということの後になつて言う。人は自分の過誤を認めざるをえぬ羽目にたち至つてもなお、その過誤が決して根本的・致命的なものではないことをどこまでも固執せずにおれないのである。「私が悪かつた」という言葉は人間としての人間が、

自らの能力だけに頼つては言うことのできぬ言葉なのである。

しかも、自己の非を認めることが一つの徳であり、力であることは誰でも知つてゐる。さればこそ、却つて世馴れた、利口な人間の中には、矢鱈と「濟まぬ濟まぬ」といいたがる人も少くないのである。

「お前が悪い」という言葉は、既にそれだけで人を殺す力をもつてゐるが、「私が悪かつた」という表現は逆に生かす力をもつてゐるのである。この一言だけをまじめに言うことが、しばしば二人の人間の間全く新しい結合を創り出す力をもつてゐることは、むしろ萬人の知る事實に屬する。「濟マヌでは濟マンゾ」という言い方があるが、こういうことがともかく言えるのも、「濟まぬ」と認める言葉そのものに、何か濟ます力、借りを消す力、バランスを回復する力があるからであろう。従つて人が己れの非を認めることには、生産と創造の力が與えられてゐるといわねばならない。十分に深く己れの罪を認めた人こそが自ら眞に生き得、また人類の全體にも生命を贈りうるのである。私は自分の功績を他人に認められる時、蘇生の思いをし、より多く實在する者とされる、少くともそう思いなされる、と前(三)には言われたが、實は自らの罪業を認めることによつてこそ私は蘇生しうるのである。

しかし、問題はどこまでも私がお眞に自分の罪責を認めてはいないというそのことである。明らかに私はそういう羽目になることをこそ何ごとにもまして怖れている。私の内には科學の進歩した今日、「罪」などという語は無意味になつたといいたい心が動いてゐるのである。また自己の根本的な負目というものの存在が否定できなくなると、それを抹消するとか被覆するとか紛らわすとか、ハグラかすとか糊塗するとか、自己の智能の全力をあげて如何にもして無いことにする、途を探してゐるのである。或いは私は微かに自分の罪に感づいても、——私<sup>が</sup>他<sup>人</sup>を<sup>し</sup>つ<sup>こ</sup>く責めることの方は疑いなくあるのであつて見れば「罪」なることばが全然無意味だなどとはいへないのだから——それが時効にかかり、薄れゆき、遂にも跡かたもなく消えてしまうことをのみ希うのである。自然の力では消しえぬものを私は自然の力に期待するのである。我々は前に、私の誇りたいことがらには一般に消滅性があつて、その故にこ

そ人に認められ、著しくもされねばならぬということを見たが、私の罪や咎の方には、逆にもともとか發芽性ないしは露見性の如きものがあり、一日も早く、今のうちに摘除し、息の根をとめてしまわねばならぬかのである。かくして、私の精力の大部分といつてよい程の部分が、他人から己れの功績を認められる劃策にも劣らず、己れの過誤と負い目とを抹消する謀略に費されているであらう。

しかし、私は何故自らの罪を頑なに認めることをせず、世界と自己とに生命を贈る縁にだけでもすがろうとしないのか。私は何故よく生きることにそれほどまでも無慾恬淡でありうるのか。——自己が愛の中にあることを忘れていゝるからである。私のあらゆる罪責と無價値ともかかわらず、しかもこのただ一人の私のあることをよしとしうる、力のあることを否むからである。世から認められることに伴つていた、かの非・自己充足性は、單に人間同志の認め合うことにはさらにそれをこえた根據があることの指標なのである。

(未完)

(1) 單に知ることではなくて、認めることをこそ心掛けねばならぬと言つても、ここにはまた、何ごとをでも單に知ることによしとなすことには見られぬ危険のあることにも充分注意せねばならぬであらう。そして眞に認めねばならぬことがあるとすれば、それは自分は眞底から自分の負い目を認めようなどとはしてない、という己れのその實相をこそであらう。我々は、何ごとをでも種にして取れる限りを取ろうとしてるのであるから、外ならぬ己れの罪や過ちを認めることからでも、そこから何か取れる筈だという風に我々の心は動くのである。自分が虚榮の擣になつていなければいいで、偽善者でなければいいで、自分が質朴であることからでも、非偽善者であることからでも、我々はやはり稼ごう取ろうとしてるのである。我々は自分が非を悔いたこと、頑なな心が碎けたことからでも、矢張り稼げはせぬか、取れはせぬかと、心の動いてゆくのを止めえないのである。我々は心から貧者を憐れみ恵んでいる積りの時にさえ、人から憐れまれること、人から恵んで貰うことが、憐れまれる身にはドンなに癪に障ることかを想い出していることは少ないであらう。

(筆者 大阪市立大學文學部〔哲學〕助教授)